

チャットジーティーピー

内藤 真理子

今年も「悠遊」の季節がやって来た。私は掌編小説が書きたくてこのクラブに入ったこともあり、毎年、短編小説を投稿することになっている。だが、年ごとに書けなくなる。小説が頭に浮かばない。早々と書き上げた時期もあったのに、今年はダメか、どうしよう。

そんな時、チャットジーティーピーのことが頭をよぎった。テレビで見たことがある。

新婚の女性が夫にカレーのつくり方を教えている文章を書く。というもので、出来上がった文は、妻が少し甘えながら、面白おかしくきちんと材料、作り方を教えている場面が書かれていて、上手い！と、感心したものだった。

わが掌編小説の教室でも、Nさんが「どんなものか試してみた」と言つて、ミステリー小説をチャットジーティーピーで作ったのを見せてくれた。「母への告白」という題で、あらすじが書かれている。上質で、とても興味をそそられるものだった。

だが、奥の手を使うのは如何なものか。というより、チャットの力を借りて公開の場に出しても、分からないのだろうか？それは嫌だ！

そんなことを思いながら、今年は書けないので、苦肉の策で、過去に書いた作品をアレンジして出すことにした。必死で探した作品が、奇想天外の冒険物。原稿用紙三十枚程の小説を、四千字位に縮小した。それでも字数がオーバーしている。

「よろしくお願い！」と願いを込めて編集委員に送信した。

送信した途端に、こんな奇天烈な作品は、チャットジーティーピーで作ったのだらうと疑われ、取り上げて貰えないのではないかと心配になって来た。

そして、たかが何時間かの待ち時間を千秋の思いで待った。

「受け取りました。字数の間違えは訂正して次の委員に回します」のメール。

良かった！ セーフ？ ありがとう！